

2025年度 自己推薦入試

入学試験問題

人間総合学部 初等教育学科

小 論 文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
2. 試験開始の合図があったら、解答用紙の所定の欄に受験番号と氏名を記入してから問題にとりかかること。
3. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入すること。
4. 試験時間は、9時30分から10時30分までである。
5. 試験終了後、答案を回収する。問題冊子は持ち帰ること。

白百合女子大学

【設問】

【課題文】は、経験から知識が形成され、学びへと発展していく過程を説明している文章の一部です。この課題文を読み、以下の2つの問題に答えなさい。

問題1 著者は、「経験」について、本書ではどのように定義すると説明していますか。課題文の内容を要約し、200字以内で述べなさい。

問題2 著者は、学習者が、いわゆる「深い学び」をする過程について説明しています。この文章を参考に、学びが深まる過程について、あなたの考えを600字以内で述べなさい。

※ 自分が何かを学んだ過程を例としてとりあげること。また、課題文にある「直接経験」「具体的経験」などの「〇〇経験」という言葉を2つ以上用いること。ただし、1-3の①から⑧で示されている「〇〇経験」のすべてに言及する必要はない。

【課題文】

第2章 学びの形成における経験と知識の問題を考える（田中俊也）

1 さまざまな経験と学び

1-1 体験と経験

「経験」も「体験」も英語で表記すれば experience となる。しかしながら日本語表記ではそれぞれ異なった意味で使われることが多い。

「経験」は『広辞苑第7版』では、「人間が外界との相互作用の過程を意識化し自分のものとする」と定義され、さらに「人間のあらゆる個人的・社会的実践を含むが、人間が外界を変革するとともに自己自身を変化させる活動が基本的なもの」と追記されている。一方、「体験」はあっさり「自分が身をもって経験すること。また、その経験」とたった2行で定義されている。

こうした辞書的定義は、われわれの日常的な使い方と大差はないが、その意味するところには不明瞭な点がある。それは「体験とは経験である」というかたちで体験の定義が同語反復になっている点である。

デューイ（Dewey 1938/2004）は『経験と教育』において、教育での経験の重要性についての哲学を展開している。そのなかで、経験と体験の区別については直接的な言及はないが、以下の一文はきわめて示唆的なものである。

真実の教育はすべて、経験をとおして生じるという信念があるが、そのことはすべての経験が本当に教育的なもので、またすべての経験は同等なものであるということの意味するものではない。（Dewey 1938/2004: 30）

本書では、このデューイの言説を参考にして、経験と体験を以下のように区別しておきたい。すなわち、体験とは人間と外部世界（モノ・コト）や内的世界（記憶や言語）との表面的なかかわりすべてのことである。またそのかかわりが内的に変化し外部世界や内的世界をも変容・変革させるものである場合に経験とよぶ。本書では主に後者の「経験」、すなわち変化・変容・変革をとまなうかかわりが教育活動においておこなわれる際の問題を扱うこととする。

1-2 学習と学び

（中略）

本章では、教育活動における経験と学びの関係について、経験から知識が形成される過程、それが学びへと発展していく過程を中心にみていくことにしよう。

1-3 さまざまな経験のモード

経験にはさまざまなモード（様式）がある。日常的にも〇〇経験などと、その前に修飾語をつけて語られることも多い。ここではわかりやすくするためにあえて二項対立的に表現し、具体例を交えてそれらをまとめてみよう。

①直接経験－間接経験

経験の主体がその経験の本質的な部分に直接触れるか、間接的に触れるかの違い。就職活動を実際自分がする（直接）か、先輩の話を聞く（間接）か。

②具体的経験－抽象的经验

経験の本質的な部分を実際に具体的におこなうか、言葉などを介して経験した気になるかの違い。車の実際の運転（具体的）か、運転方法の講義の受講（抽象的）か（次項 1-4 のコルブ（Kolb）の「具体－抽象」軸）。

③外的・活動的经验－内的・反省的经验

身体をとおして外界と接するか、記憶・言語をとおして経験の本質を見極めるか。キャンプに実際に出かける（外的・活動的经验）か、その本質的な内容を振り返って省察する（内的・反省的）か（デューイの「経験の相互作用」、コルブの「活動－反省」軸）。

④全感覚的经验－視聴覚的经验

実際に身体をとおして五感すべてをはたらかせて外界と接するか、視覚・聴覚のみをとおして接するか。実際の教室での講義受講（全感覚的）か、ウェブを介した遠隔講義受講（視聴覚的）か。

⑤主観的经验－間主観的经验

個人・ひとりでおこなう（主観的）か、他者とのコミュニケーションも介しておこなう（間主観的）か。ひとりで図書館で調べ学習する（主観的）か、グループで一緒にする（間主観的）か。

⑥再帰的经验－新規的经验

すでに経験したことがあることをする（再帰的）か、やったことのない初めてのことをする（新規的）か。すでに知っていることの復習（再帰的）か、新しい事柄との出会い（新規的）か。

⑦主体的経験－受動的経験

自分から好んでおこなったこと（主体的）か、誰かに指示されておこなったこと（受動的）か。自分の興味関心のあることを調べる（主体的）か、教師に指示されたテーマを調べる（受動的）か。

⑧瞬時的経験－連続的经验

1 回限りの思いつきのことをする（瞬時的）か、関連することを継続的にする（連続的）か。原子の周期律表を 1 度見る（瞬時的）か、化学の授業のたびに周期律表を見る（連続的）か（デューイの「経験の連続性」）。

ここではあえて二項対立的にしかも別々のモードとして分類したが、類似したモードもあり、同じひとつの経験をこうしたさまざまなモードで複合的にとらえ直してみることが重要である。

1-4 コルブの経験学習論

経験と教育の関連については先に紹介したデューイの古典的名著があるが、もうひとり、コルブ（Kolb 1984）も経験と学習について明確にまとめている（山川 2004；松尾 2006；田中 2017）。

コルブはまず、経験を支えるレイヤー（層）としてふたつのレベルでとらえ、それぞれにふたつの二項対立的な軸を想定している。本章 1-3 のさまざまな経験のモードと重なるものである。

まずひとつ目は経験を「活動」レベルでとらえる。そこには具体的な活動と抽象的な活動、および、見るだけの観察的な活動と、触って実際にやってみるという実験的な活動がある（図 2-1）。次に経験を「思考」という内面的なレベルでみると、実際に経験しているときの思考とそれを概念化する思考の軸と、実際の活動に対してそれを内面化する振り返り（反省）するという軸がみえてくる（図 2-2）。このふたつのレイヤーを重ね合わせたものがコルブの経験学習論の基本的なモデルである（図 2-3）。

これは、教育活動において日常的に感じている子どもたちの「わかる—できる」の往還を見事に説明できるモデルでもある。すなわち、はじめに教育内容に関連した具体的な経験をさせる（具体的な経験 1:「する・やる」のレベル）。それをもっと深いレベルで反省的に観察しつづける（反省的观察 1:「もっとする・やる」）。そこから、具体的な経験を抜け出したある種抽象的な概念化がおこなわれ、「なるほど!」と、そのことがわかった気になる（抽象的概念化 1:「なんとなくわかった!」）。ただ、これはまだ「仮の知識」であり、それをさらに広げて拡張的にいろいろ試してみる（活動の実験 1:「ためしてみる」）。それを経て最初におこなった具体的な経験が、「知識」ともなった経験へと変化していく（具体的な経験 2:「できる」のレベル）。経験はこうして、再び反省的观察 2→抽象的概念化 2（今度は「なるほど、わかった!」のレベル）、活動の実験 2→具体的な経験 3……と広がっていき、知識も深化していく。いわゆる「深い学び」ができるようになっていく。

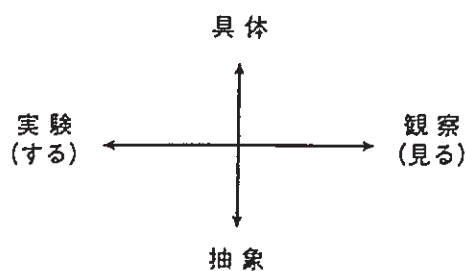


図 2-1 活動レベルの経験

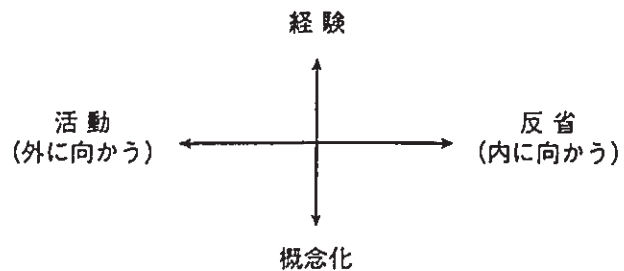


図 2-2 思考レベルの経験
(Kolb (1984: Figure3.1) をもとに作成)

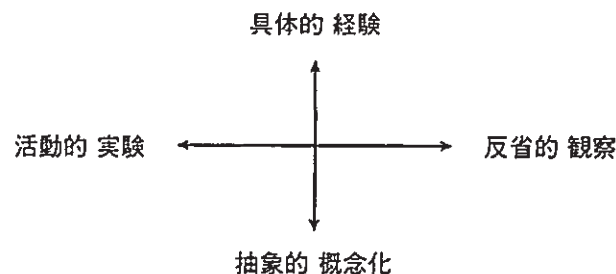


図 2-3 統合された経験 (Kolb (1984: Figure3.1) をもとに作成)

出典：『学びを育む 教育の方法・技術と ICT 活用—教育工学と教育心理学のコラボレーション』
岩崎千晶・田中俊也 編著，北大路書房，2024，第 2 章 より 一部抜粋。